

# 子どもの本

## 研究会

【私の一冊】

リンダ・グラットン『ワーク・シフト』プレジデント社

新潟大学医学部 和泉邦彦

私ことで恐縮です。平成二九年七月より、新潟大学医学部へ特任講師として赴任いたしました。病院薬剤師として二〇年以上勤め、教育や研究に無頓着だった私が、まさか国立大学の、ましてや医学部で教官として勤めようとは。

過去すでに『ルーマニアの民話』や泉靖一『遙かなる山やま』をここで紹介した。それらに匹敵する本は思いつかないが、今の私が挙げるなら『ワーク・シフト』だ。

新潟大学からお声がかかった折も折、母校の名古屋市立大学から学生向けのキャリア支援講演を依頼された。自身が迷いのか真ん中にいながら学生にキャリアプランを話すことが可能かと考えた時、この本を手にとった。

本書では、3つのキーワードが示される。ゼネラリストから「連続スペシャリスト」へ。孤独な競争から「協力して起こすイノベーション」へ。そして、大量消費から「情熱を傾けられる経験」へ。以下、私なりの解釈。

ひとつの組織の中で各部署を一通り経験し、閉鎖的・画一的に再生産される管理職がここでいうゼネラリスト。しかし、社会の変化の速度は上がり続ける。求められるのは、全く新しい世界で再び専門家になる、そんな変身を繰り返す力。ゼネラリストは、変身の訓練機会を組織の中で知らず知らず失う。むやみに飛び出せばよいのではもちろんない。新しい世界に挑む力は、他分野とのつながりから生まれる。それは一般的に描かれる安定（それがいつ崩れるかわからない時代、というのが本書の元々の趣旨）の線路から降りることを意味するが、節制した日々を送る習慣もまた、長い人生の不安を減らす訓練になる。ものに代えられない「情熱を傾けられる経験」で人生を彩ればそれが豊かさだ。

私はここ6年ほど、本職の他に、災害医療の場で活動してきた。今回の転身は本書を読む限り必然と感じる。あと2回ぐらいは大きな転機がありそうな予感もする。

熊本子どもの本の研究会とのつながりも、今の私を作った要素に違いない。

